

その仕事に学生もかり出されたが刻々に被災者はふえるし、先輩から借りた本を焼失したり、友人に貸した教科書だけが助かったりしているうちに、この大研究もついに実らずに敵は意外な新型爆弾を投下して、戦車ならぬジープで上陸してきた。昭和20年10月木内先生の玄島長崎調査談が、戦後はじめての地理学研究の報告であった。同年11月某日の私の日記にはこう書いてある——日比谷と銀座は国際主義のるつぼ、兼鴨と宮城は国粹主義のはきだめ。明治維新の再来を思わせる近頃の世相。

“Alumna”

式 正 英

戦中から戦後にかけて過ごした学生生活は、坊主頭に巻ゲートルからせいせいヨレヨレのスフ織学生服が身にまとえた程度で、衣食足らぬましの不満の多いものだった。それでも何かと思ひ出すまゝに和やかな気分になれる原因の一つは、当時きわめて珍しかった女子学生が一人同級生にいたことだ。終戦後、学制の変化によって傍系からの入学を許す様になり、やっとちらほら女子学生の姿が東大の権内にも見られる様になったこの頃のことである。その稀少な女子学生が、僅かな数の同級生の一人にいたのだから、大いに優待とすべきであったのだが、何しろ男女別学のたてまえでこちこちの教育を受けて来ていたので、机を並べて学んだ筈の、大して裨益し合うこともなく過してしまった。

この人をT女史としておこら。T女史は才気煥発で交際上手の活潑な、小粒ながらなかなかチャーミングな人だったので、教室の中でいつもスター的存在であり、アドマイアラーも少からずいた様で、却ってT女史にとっては同級生などは眼中になかったのだらう。この所謂才色兼備の女史は、卒業後都立大社会学の助手となり、二年たため内にやめて内科医と結婚し、今では二児の母親である。併し、面白いもので学生時代のつきあいは浅かったものの、年に一度開くクラス会の時には、必ず出席する常連であり、しかも2時過ぎの二次会、三次会の最後までつきあってくれるのである。一人のアラムナのいるお蔭で、私共のクラス会だけが、まことに花をそえて豊かな感じである。

学生のころ、一人の女子学生の存在が、私達男子学生の勉学の励みになったかどうかの点では、たまたま感度の鈍い男の集まりであった為なのか、目に見えた効果があった様にも思えない。それならばいなかったも同然かと言うとそれも云えない。しっかりした人で、交際範囲も広がったから、教室内の誰かがナイトになる必要もなかったが、教室内のアトモスフィアに和みをも

もたらしていたことは確かである。私の様に人づき合いの悪いはにかみ屋でも、この人から愉快な印象を受けた覚えがある。1950年の7月、卒論テーマを高山氷河遺跡にもとめたこともあって、二級下のS君をカメラマンにしたて、槍穂から黒部奥にかけて相当長期間のフィールドワークに出掛けた。小さなテントを張り、モレーンやルンドヘッカーを探しながら、ハイ松の茂みや石礫の原をかけまわって二週間以上も過ぎた頃である。夏雲の湧きあがる、人里を遠く離れた奥山の中で、仙人の様な気持で雲表を行く醍醐美にみたまっていると、岩蔭から突然あらわれた少数パーティの中に、何とにこやかに微笑むT女史がいるのではないか。野口五郎岳の南側園谷壁の上で、敬談敬分に及んだことは云うまでもない。偶然というには余りに舞台装璜の整い過ぎた感じであるが、楽しい充足した思い出をして今でも心に鮮に残っている。女性には生活を芸術的にする様な尊敬すべき才能があるのではないかと思う。その点本学学生に接してもしばしば感ぜられる。女子学生をクラスメートに持ったことの功罪は、こうした面に発揮されることではないかと思っている。

天気予感

吉田 栄夫

今年も梅雨前線が停滞する頃となった。涼しい爽やかな風と、むっとする暑さ—ドイツ語に *nasskalt* という言葉があるが、これはまさに *nassheiß*—の交錯に、気塊の動きを肌感ずる時期である。

梅雨時となるとよく思い出すのは、卒論の年のことである。卒論とは関係なしに、6月初め、S先生やI先生の御伴をして北九州を訪れた。1日フィールドを歩いただけであとは全部雨という始末、1週間近い滞在を無為に過ぎて引揚げたが、下関から姫路まで、水田の大半は水に没していた。この後で、関門トンネルに濁水が流入するという騒ぎが起った時のことである。7月に入っても一向に前線は北上せず、紀州は湿舌とやらの御蔭で大水害に見舞われることとなった。

この天候はさらに引続いて、夏休み、総計1月ほどの間、フィールドにとった北八ヶ岳に入って、拙ない調査を試みることにしたが、この間歩けたのはやっと10日という有様だった。東北地方南部や中部地方の山間部は、ひどい冷害を受けた。秋になって夏の遅れを取戻すべく、再びフィールドに出掛けた私は、今度はこの冷害に悩まされた。当時、誰もいない別荘の一つを拝借してベースとし、自炊をしながら山歩きをしていたが、麓の水田には実らぬ稲が穂を立てて秋風にそよいでおおり、農家の人々がパンやうどんを買って